

慈童物の能解説

竹 本 幹 夫

いわゆる慈童物の能には次の四種がある。

- (1)室町末の『能本作者注文』や『自家伝抄作者付』に見え、『閑吟集』187番歌の田楽節をその一部に含み、観世宗節筆謡本が伝存する
 △慈童V(田楽能△菊水Vもこれに同じ)。(2)安土桃山頃の『いろは作者注文』に見え、鳥飼道晰筆謡本が伝存する△枕慈童V(3)前出の△慈童Vクセ直後から別詞章となり、(2)△枕慈童Vの末部へと接続する改作本で、鴻山文庫蔵田安本番外謡や『謡曲叢書』などに所収の通称△菊水慈童V。(4)前出△枕慈童Vの後半部にもとづく改作曲で、明和改正謡本に新加された観世流独自の△枕慈童V。

右四曲中、(1)△慈童Vと(2)△枕慈童Vとは元禄から享保にかけての演能記録に散見するが、宝生座が將軍綱吉の命で演じ始めたものであり、△枕慈童・菊慈童V△菊水慈童・菊慈童Vの名が、宝生座の享保二年(一七一七)・同六年の両書上に見える。△菊水慈童Vとは(3)のこと、△菊慈童Vとは△慈童Vのこと

と、それぞれ考えたい。両曲の名は享保九年の書上に見えないから、いずれも実験的に演じられたのみで廃絶したものでらしい。△枕慈童Vの方は同二年正式所演曲となり、後には他流もこれに追隨するようになる。天明三年(一七八三)に金剛・喜多がこれを書上に登録する。これに先立つ明和二年(一七六五)、観世元章は宝生の△枕慈童Vに対し、それを改作した独自の(4)△枕慈童Vを所演曲とした。宝生流△枕慈童Vと同内容の曲は、観世では明治初期に新加されたものの、すでに元章の△枕慈童Vがあったために、△菊慈童Vの名で別曲扱いはしただけである。

観世の△菊慈童Vにせよ、他流の△枕慈童Vにせよ、宝生の△枕慈童Vを基本的に踏襲したものであるが、宝生流の詞章は元禄頃に現在の形に改訂され、以後その形が広く伝承されたらしい。江戸中期以前の△枕慈童Vの内容は、穆王の枕をまたいだ罪により、慈童が「てつけん山」(レッケンサンと訓むのは明

和本以降の観世のみ)に護送され、山中に遺棄される所までが前場、数百年の後、魏の文帝の臣下が霊水求めて訪れる所が後場の冒頭となり、数百年の眠りから覚めた慈童との応対、穆王相伝の妙文の由来を説くクリ・サシ・クセ、楽、ノリ地で終る。これを後代の△枕慈童Vと比較すると、江戸後期以降の謡本には前場全体と後場のクリ・サシ・クセとを欠いており、切能的な祝言能としてより徹底したものとなっている。完備した内容の諸本が省略本にとってかわられる丁度中間に元禄享保期が位置する以上、△枕慈童Vの現在の形への改訂に当時の宝生大夫友春あたりが関与したことを想定しても、失当ではあるまい。

一方廢曲のまま終った(1)△慈童Vは、幼少ながら賢君の誇れ高い魏の文帝のために菊水の霊薬を奉るべく参内した彭祖(慈童)が、その効能を説き、菊葉に書写した穆王相伝の妙文に感応して霊薬となった由来を語って、帝のてつけん山行幸を請い帰山する(中入)。やがて行幸あると、慈童は霊薬を更に捧げ、文帝は百年の齢を延ぶという内容。無理に複式夢幻能形式に構成したこともあって、中入の段を中心に不自然さが目立つが、これを簡略化する目的で(3)の△菊水慈童Vが友春周辺で試作されたことも考えられる。但し全体的

には必ずしも△枕慈童Vに劣る作風とも言えない。同類の両曲がともに所演曲化する負担を避けて、より安直な方向を選んだ結果が、△枕慈童V改訂本なのである。

文献上の初出例が先行することから、能としては(1)の△慈童Vが最初に成立したと考えるのが常識的であろう。(2)の△枕慈童Vは、構想の一部に△蟬丸・石橋・養老・邯鄲Vなどの影響をも受けつつ、慈童説話を脚色して劇化したような作風であるが、すでに△慈童Vの存在していたことが、あえてそれとことなる構想を作者にとらせたものかも知れない。この両曲の題材は、天台系の即位灌頂口決にまつわる慈童説話の系譜と関わるものであることが、伊藤正義氏「慈童説話考」(『国語国文』昭和55・11)に説かれている。この説話には、大別して主人公を周穆王の侍童とするものと、秦始皇の侍童とするものとの二通りがあるが、(1)の△慈童Vにおいてはこの両説が並存し、ために作品に不整合をきたしている。△慈童Vのクセの部分では、穆王による天竺の妙文招来説話をうけて、「其後慈童は、……誤つて皇帝の、御枕を越えし咎により」と続くのであり、これは穆王の侍童を主人公とする系統の説話にも見られる接統法である。これに対しクリ・サシ・クセ以外では、シテは「是は昔秦の始皇に仕へ奉りし」と名

告るのが古写謡本の通例で、これを「周の穆王」とする本もあるが、後代の改変と認められる。つまりクリ・サシ・クセとその他の部分とは、題材の出所をことにし、従つて成立事情をことにする公算が大きい。独立の曲舞謡に前後をつける形で△慈童Vが成立したのではあるまいか。このような不整合が成立後長らく放置されたのは、滅多に上演されなかったからと考えれば説明はつく。△慈童Vは年少の君主を祝福する内容であり、幼少の將軍が次々に擁立された室町中後期にいかにもふさわしい作風である。そうした機会に即成され、時々上演されるだけで放置されたといった事情も想定できぬことはない。なお、本曲が田楽出自の作品か否かについては、即断はできないようである(伊藤氏説)。

さらに△枕慈童Vのクリ・サシ・クセにも同様の不整合を指摘できる。一曲の重要な小道具となる妙文を記した枕のことが、一応は伝統的慈童説話をふまえるクリ・サシ・クセでまったく言及されないのである。「枕の要文」が菊に頭れ霊薬が生じたとする本曲の構想は、このクリ・サシ・クセの存在によってかえつてその不可解さが強調される。「枕の要文」とは、△邯鄲Vの枕から連想された作者の創作であつた可能性すら考えられよう。すなわちこれも独立の曲舞謡を一曲中に転用

したものではなからうか。江戸中期に該部分をも省略したのは、作品としての一貫性という点からも、成功であつたといえよう。

(実践女子大学助教)